

## 研究ノート

# 学生の実習経験と老年看護実習における学びの特徴 —テキストマイニングによる自由記述回答の分析—



安田 千寿、北村 隆子、畑野 相子  
滋賀県立大学人間看護学部

**背景** 老年看護の実習効果については、学生の学びの内容と、老年看護の実習を迎えるまでの準備段階との関係が明らかになっていない。老年看護学実習の課題達成のためには、領域を超えて経験する基本的な実践能力の形成も影響すると考える。そのため、老年看護実習までに経験した他領域の実習との関係を調査することとした。

**目的** 老年看護実習における学生の学びを、実習終了後の学びのレポートよりテキスト分析して評価するとともに、実習までの他領域実習経験数に応じた学びの特徴を明確にする。

**方法** 老年臨床看護論実習を履修したA大学の学生56名を対象に、老年臨床看護論実習記録における「実習で学んだこと」についての自由記述をテキスト分析した。1) テキスト分析により抽出したデータを01型データとみなし、コレスポネンス分析を適用した。2) 老年臨床看護論実習までに経験した他領域の臨床看護論実習数を「初期」「中期」「後期」として群別し、コレスポネンス分析により、経験した実習数により学びに特徴的なカテゴリーがあるか、それぞれの関係性を視覚的に表現することを試みた。

**結果** 分析の結果4つの特徴的な学びのグループ、①【病気-特徴】、②【理解-関わる-思う-大切】、③【今-情報】、④【高齢者-援助-中-できる-持つ】が形成された。また実習初期群はグループ①【病気-特徴】およびグループ②【理解-関わる-思う-大切】の記述が多く、実習後期群は「アセスメント」「合う」「難しい」「看護」の記述が多いことを示した。

**結論** 今回の調査で4つの学びの特徴が明らかになった。この学びは人の発達段階に関係なく看護全般において必要な学びであると同時に、対象が高齢者であるために強調された学びであったと考えられた。また実習時期に応じて学びが異なることが示され、学生の学びの到達状況を把握し、実習時期に応じた指導が必要なが示唆された。

**キーワード** 高齢者, テキスト分析, 学習準備状態, 老年看護論実習

## I. 諸言

日本が平成19年に超高齢社会の域に達してからもなお高齢化は進み続け、日本の総人口に占める割合は23.1% (平成22年10月時点) となっている<sup>1)</sup>。そして保健医療

What students learn in the gerontological nursing practice depends upon their stages of preparation for the practice

Chizu Yasuda, Takako Kitamura, Aiko Hatano  
The University of Shiga Prefecture, School of Human Nursing

2011年9月30日受付、2012年1月9日受理  
連絡先: 安田 千寿

滋賀県立大学人間看護学部

住 所: 彦根市八坂町2500

e-mail: cyasuda@nurse.usp.ne.jp

を取り巻く環境が変化し学生も多様化していく中、老年看護学教育に関する研究数は増加している。老年看護の専門性の確立や教育内容の検討はさらに重要視され、我々も看護基礎教育から臨床実習における老年看護の効果的な学習方法を検討してきた。その中で、講義と演習と実習の学習視点や目標が一貫性を持つように指導を組み立てること、高齢者を理解し、共感し、ケアの根拠へと繋げること、やがてそれを応用できる看護学生に成長できることを目指して関わってきた<sup>2)3)4)</sup>。

老年看護の実習を取り上げた研究では、学習内容の分析や実習効果の検討<sup>5)</sup>、また老人保健施設での学びと指導上の課題を明らかにした研究<sup>6)7)</sup>などがある。これらより、実習で「高齢者を尊重する態度」について評価が高くなる傾向や、生活の場を重視した看護実習に伴う学習効果、演習で行った高齢者疑似体験が実習中に活用で

きた効果、施設の臨床指導者に与える影響などが報告されている。また実習終了後のレポートより、実習目標に照らした学びをカテゴリー化して分析した研究<sup>8)</sup>では、日常生活場面での関わりによりほぼ目標が達成されていることが報告されている。これらの研究から得られた学びの内容はほぼ同一種であり、老年看護実習の教育内容が同じ方向に足並みを揃え、定着してきたことがわかる。

しかし、これまでの報告では老年看護実習における学びの目標の到達と、学生が老年看護の実習を迎えるまでの準備段階が学びにどう影響しているのかについては疑問が残る。というのも看護学教育においては、レディネス（効果的に授業を実施するための発達の・学習的・態度的・社会的準備性）の規定要因を、成熟、過去の学習経験、教授方法の3要因とする見方がされており<sup>9)</sup>、学習課程の順次性が重要と言われているからである。老年看護学実習においては「高齢者」そのものを理解することを前提に、「疾患を有する者」の「看護を実践すること」が課題であり、課題達成のためには、領域を超えて経験する基本的な実践能力の形成も影響する。そのため、老年看護実習までに経験した他領域の実習との関係を調査することにした。またレディネスの影響をみるために、学生の学びの視点を老年看護実習目標より広くとらえ、学生自身の記録を軸として学びを分析することを試みた。よって本研究では、老年看護実習における学生の学びを実習終了後の学びのレポートよりテキスト分析することで評価するとともに、実習までの他領域実習経験数に応じた学びの特徴を明確にすることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 対象

対象は3年次から4年次に行われる老年臨床看護論実習を履修したA大学の学生56名である。

### 2. 調査期間

平成21年10月～平成22年6月までの実習期間中に、学生は2週間の老年臨床看護論実習を行い学生各自が実習最終日に学びのレポートを記録した。レポート回収は、平成22年8月～9月の1ヶ月間で行った。

### 3. 分析方法

老年臨床看護論実習記録における「実習で学んだこと」についての自由記述を、テキストマイニングの手法により学びの内容を分析した。

- 1) 自由記述の文章をテキスト分析した。分析にはSPSS Text Analysis for Surveys 3.0Jを用いた。
- 2) テキスト分析により抽出したデータを01型データとみなし、コレスポネンス分析を適用した。これに

より、複数の単語の類似度や関係の深さを指標に分類し、単語同士の関係を表した。

- 3) 老年臨床看護論実習までに経験した他領域の臨床看護論実習数を「初期：0回～1回」「中期：2回～6回」「後期：7回～8回」として調査し、コレスポネンス分析により、経験した実習数により学びに特徴的なカテゴリーがあるか、それぞれの関係性を視覚的に表現することを試みた。初期、中期、後期の群別は、A大学の実習カリキュラムに従い筆者により独自に定義した。統計解析にはSPSS Statistics 19.0、SPSS Categoriesを使用した。

## 4. 倫理的配慮

研究の趣旨と内容および、研究への参加は任意であり参加に同意しないことをもって不利益な対応を受けないこと、参加に同意した場合であっても、不利益を受けることなくこれを撤回することができることを書面と口頭で説明した。研究への参加の呼び掛けは単位認定終了後に実施した。分析する実習レポートは学生に返却した後、同意を得られた者だけ氏名を消した上でポスト投函にて回収した。なおこの研究は滋賀県立大学倫理審査委員会の承認を得て行った。

## III. 結果

### 1. 対象者の属性

回収された学びのレポートテキストは34名分（回収率60.7%）であった。そのうち、老年臨床看護論実習が初めて、もしくはそれまでに他領域の実習を1回経験した学生（以下「初期群」とする）は9名、他領域実習を2回～6回経験した学生（以下「中期群」とする）は18名、他領域実習を7回～8回経験した学生（以下「後期群」とする）は7名であった。

### 2. 自由記述のテキスト分析

34のテキストの名詞・動詞・形容詞・形容動詞を係り受け分析（関係性を把握する方法）により抽出した。そのうち「ある」「する」「学んだ」など、分析するのに重要でないと思われた単語を除き、「高齢者」「高齢の方」などの類義語を統一する作業を行った。また、「思う」に関しては、「～の想い」と同意味であると判断されるものは残し、「～だと思う」に相当するものは除外した。抽出された単語のうち、5回以上出現した単語を出現頻度に基づく方法で各要素にカテゴリー化した。その結果140の単語が作成された。

140の単語のうち、学生の約半数が使用した単語は、【高齢者（34）、できる（31）、援助（29）、持つ（25）、大切（23）、行う（22）、中（22）、思う（22）、関わる（19）、

今 (18)、生活(18)】であった。10個以上の頻度で出現した単語は、【高齢者 (34)、できる(31)、援助(29)、持つ(25)、大切 (23)、行う(22)、中 (22)、思う (22)、関わる (19)、今 (18)、生活(18)、理解(15)、情報(15)、病気(14)、難しい(13)、自分(13)、重要(13)、アセスメント(13)、力(13)、他(13)、わかる(13)、多い(13)、合う(12)、特徴(12)、みる(11)、ひとつ(11)、計画(11)、看護(10)、よい(10)、情報収集(10)、言う(10)、使う(10)】の32個であった (図1)。

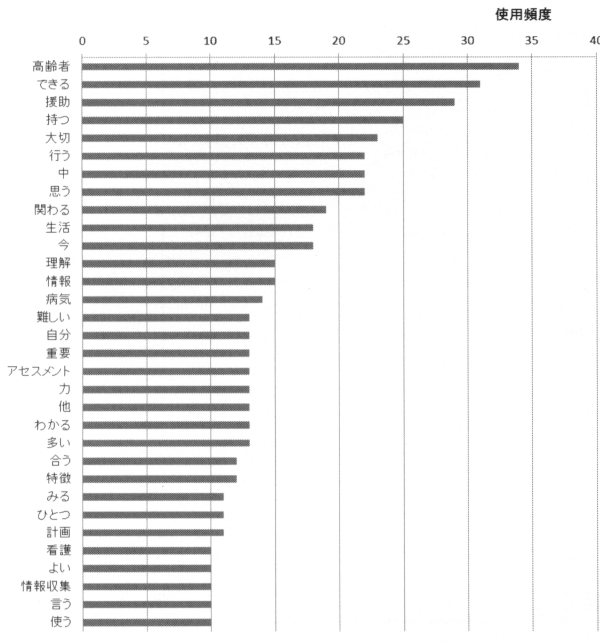


図1 10個以上使用された単語とその頻度

### 3. 単語間の関係性

10個以上の頻度で出現した単語に絞って、それらの間に何らかの規則性がみられるかを検証するため、コレスポネンス分析を行った。分析の結果、32の単語は31次元に要約された。1次元の特異値は0.368、固有値0.136、累積寄与率0.124、2次元では特異値0.346、固有値0.120、累積寄与率0.234であった (表1)。図2の単語を列とする列スコアの布置図において、各単語間の関係性を表現した (図2)。コレスポネンス分析では、行および列のカテゴリー間の距離が近いほど項目間の類似性は高くなる。また、原点から遠くに位置するものは少数派である。これより、4つの特徴的なグループが形成された。グループ①は【病気-特徴】、グループ②は【理解-関わる-思う-大切】、グループ③は【今-情報】、グループ④は【高齢者-援助-中-できる-持つ】であった。原点からの距離より、グループ④は単語の出現頻度が高いことが明らかとなった。

### 4. 実習の経験数と単語との関係

図2で示した列スコアに対して行スコアは対象同士の関係となるが、そこに対象者の実習経験数によって群別した情報を加えると、図3のようになった。初期群は次元1軸のプラス側および次元2軸のマイナス側に偏っていることが明らかとなった。また、後期群は次元2軸のポイントがプラスに偏っていることが明らかとなった。続いて実習初期群、中期群、後期群と、32の単語それぞれの関係性を検討した。コレスポネンス分析の結果、3つの群は2次元に要約された。1次元の特異値は0.231、固有値0.053、累積寄与率0.630であった。しかし、3つの群と単語のクロス集計表に $\chi^2$ 検定をした結果、 $P=0.96$ で統計学的な有意差は認められなかった。そのためコレスポネンス分析による布置図からは関係性を見出すことができなかった。

表1 単語間のコレスポネンス分析における固有値

次元	特異値	固有値	寄与率	累積寄与率
1	0.368	0.136	0.124	0.124
2	0.346	0.12	0.109	0.234

## IV. 考察

### 1. 学びの4つの特徴

単語間の関係より、学生の学びの記述には4つの特徴があると考えられた。この単語間のグルーピング手続きに至っては、もとのテキストデータの一部に戻り文章を読んで全体を要約した結果と、テキスト分析の結果が一致するかの検証をした上で行い考察した。それより、グループ①では「病気」と「特徴」の2つの単語から構成され、疾患の理解や病気の特徴をとらえるという基礎的の学力について示された。実習で受け持つ高齢者は、複数の疾患を有しているのが現状であり、学生はひとつ一つの疾患の理解のみでなく、複合された症状とその対応に苦心する。対象に苦痛な症状が現れた時、実際にどう対応するのかという看護実践には疾患の基礎的知識が必要となるが、実習ではその知識を引き出せず、受持ち高齢者の心身的な苦痛に共感しながら立ち竦む場合が多い。そのような具体的な経験を記述する学生が多く、経験を踏まえて基礎的学力の重要性に気づく結果となっていた。グループ②では「理解」「関わる」「思う」「大切」で構成され、対象との関わりや大切さや関わることで対象理解につながることも、また、対象の想いを理解することが示された。このことは、学生自身が関わりや行動を起すことの意味付けや、対象の心理的背景の理解が看護ケアには不可欠という学びと捉えることができた。実際に実習では学生が能動的に働きかけることが困難で、コミュ



ニケーションのとり方に悩む学生が多い。さらに加齢による障害がその困難に和をかけるため、意識した働きかけが必要となる。そのような課題を乗り越えての学びだと捉えられた。グループ③は「今」「情報」の2単語を含み、対象高齢者の「現在」の情報と「今まで」の情報の二つの面から構成されていた。「現在」の情報については、学生が五感を使用して情報収集を行う中で感じ取ったものと考えられた。自らの力で情報を集めることは、初めからカルテに記載されている情報に後ろ盾されて計画立案するよりも、対象の看護に必要なと思う情報を正しく取り見極めることが必要とされる。また、情報はカルテ記載時よりも刻々と新しく塗り替えられていることを実感する機会でもある。「現在」と「情報」はその実感が表現されたと捉えられる。「今まで」の情報からは、学生が、対象＝高齢者であることを実習の軸とし、対象を形成するこれまでの生き方を知ることが看護のなんらかにつながると意識された結果だと考えられる。グループ④は「高齢」「援助」「中」「できる」「持つ」から成り立ち、援助経験の中から高齢者ができること、持っている力を見出したことが読み取れた。加齢による特徴には身体の衰退があげられるが、それと同時に維持し続ける力や高まっていく力も存在する。学生は経験の中で、つまりケアの立案から実際に援助を通して反応を得ることで、高齢者の持つ力を実感・評価し高齢者の肯定的な面を活かす看護を学んだと考えられる。また、援助を通して高齢者自身が持つもの＝セルフケアの観点が示された。この4つの単語間の特徴は語句を共有する部分も多く、互いに影響し合って学びの特徴を形作っていることが明らかになった。

以上の4つの学びの特徴は、人の発達段階に関係なく看護全般においての学びであると同時に、対象が高齢者であるために強調される学びであったと考えられた。

## 2. 実習経験数と学びの関係

対象者IDの行スコアを、対象者の実習経験数の背景に置き換えたことにより、実習経験数と学びの関係を明らかにした。コレスポネンス分析では、単語の布置図と、対象者の布置図を重ね合わせてみることができる。これにより実習初期群は図の右下のほぼ同じところに位置しており、単語間で構成されたグループ①【病気－特徴】およびグループ②【理解－関わる－思う－大切】を記述したことが明らかになった。老年看護実習で達成感を抱いた学生の学びのプロセスを明らかにした赤木らの研究<sup>10)</sup>では、「自分の考えを提案して実践できる」までに「患者がみえるようになる」という実習経過とともに推移する局面があることを述べた。これは看護を計画的に実践する前段階に、対象である高齢者を理解する過程を経ていることを示し、本研究で実習初期群がまずその

段階を意識して経験したことが同様であったと考えられた。特に認知症を有する高齢者の理解は、身体的な状態や思いの把握、能力の発見、ケアが与える認知症高齢者への影響の大きさを知るといった対象理解の進展があると述べられており<sup>11)</sup>、本調査の実習でも、認知症高齢者を理解しようと困難を乗り越えるごとに印象づけられた学びだったといえる。

山下<sup>12)</sup>は、看護学実習において学生は7つの概念で表現される行動をとることを示している。それは学生が領域を超えて共通してとる学習活動であり、その一つに【目標達成に向けた学習資源の活用と機会の獲得】がある。これによると、学生は既習の内容や過去の実習経験、実際に観察した現象を学習資源として活用し、学習や看護の機会を獲得し実習目標を達成しようと言われている。とすれば実習初期群では、複数の疾患理解のための数多くの資料やカルテの活用、また対象を理解するための方法をこれから獲得する段階であったと考えられる。これより初期群は、過去の知識を活用する方法を知ること、指導者を追跡しながら実践すること、技術を探求し模倣することを通して、疾患の理解、認知症高齢者の理解の学びにつながったと考えられる。

一方、実習後期群は図の上部に偏っており、「アセスメント」「合う」「難しい」「看護」の記述が多いことを示した。これらの単語同士には強い関連はないが、ひとつ一つの単語の意味付けは学生の実習時期による学びの分析に重要であると思われた。「アセスメント」はその難しさや重要性を述べたものが多く、アセスメントが充実してこそその看護計画立案だという学びも多くあった。「合う」は対象のペースに合わせることや、生活のリズムに合わせることで、状態変化に合わせることで、他職種と連携し合うこと等、様々な事象と合わせることで取り上げられた。いずれも状態を把握するだけの情報収集から一歩前進し、状態を理解した上で対象と共に行動を起こそうとする内容であった。そして、「難しい」とは、そのような看護が重要だと認識する一方、やってみて難しいという実習ならではの学びであったと理解できた。それらが実習後期の特徴であったが、後期群にも関わりや疾患の知識の重要性は理解されていた。それらを土台として実践の形をとることで、学生自身が実習の全体を眺められるようになり、実践してきたことを評価する力がついてきたと考えられた。

## V. 結語

今回の調査で4つの学びの特徴が明らかになった。この学びは人の発達段階に関係なく看護全般において必要な学びであると同時に、対象が高齢者であるために強調された学びであったと考えられた。いずれも高齢者の特

徴を理解し、看護展開をしていくのに重要な学びであると思われた。また今回、実習時期に応じて学びが異なることが示され、学生の学びの到達状況を把握し、実習時期に応じた指導が必要なことが示唆された。

## VI. 研究の限界

テキスト分析では単語の回数を数値化して分析するために、学生が感受性豊かに様々な言葉で記述した経験は数値として同じ言葉で蓄積しにくく、結果に表れなかったものもあった。また一人のレポート内に繰り返し使用される単語には、学生の想いの強さが現れていたが、テキスト分析ではそれが反映されず、学びの強さを読み取るには分析手法に限界があった。対象人数も限られていたことから、今後は調査数を増やし、今回の結果をもとに実習準備段階と学習内容について検討を重ねる必要がある。

## 謝 辞

本研究の趣旨をご理解いただき、ご協力いただいたA大学の学生の皆様ならびに、学生の学びにご協力くださいました実習関係施設の皆様に深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 内閣府：平成23年版高齢社会白書，印刷通販，2011.
- 2) 畑野相子，北村隆子，安田千寿：老年看護学教育プログラムが看護学生の高齢者イメージ形成過程に影響する要因(第1報)，人間看護学研究，8，35-46，2010.
- 3) 北村隆子，畑野相子，安田千寿：老年看護学教育プログラムが看護学生の高齢者イメージ形成過程に影響する要因(第2報)，人間看護学研究，8，47-56，2010.
- 4) 安田千寿，畑野相子，北村隆子：老年看護学教育プログラムが看護学生の高齢者イメージ形成過程に影響する要因(第3報)，人間看護学研究，8，57-66，2010.
- 5) 古村美津代，中島洋子：健康な高齢者との触れ合いを通しての実習の学び，老年看護学，8-85，2003.
- 6) 西出りつ子，佐藤敏子，岡部充代：老人保健施設実習における「課題学習」の学習効果と指導の在り方の検討，三重看護学誌，5，41-54，2003.
- 7) 久代和加子，南川雅子，亀井智子：老人保健施設で行う老年看護の実習における学びと課題，聖路加看護大学紀要，27，52-58，2001.
- 8) 沖中由美，中野静子：老年看護学実習における学びの分析，愛媛県立医療技術短期大学紀要，15，81-87，2002.
- 9) 杉本みどり，舟島なをみ：看護教育学第4版増補版，212-214，医学書院，2009.
- 10) 赤木京子，福田和美，渡邊智子：老年看護実習で達成感を抱いた学生の学びのプロセス，看護展望，34(3)，87-93，2009.
- 11) 千葉真弓，原田美香，細田江美，楠本祐子，渡辺みどり：介護老人保健施設で老年看護実習における学生の学び，長野県看護大学紀要，10，21-32，2008.
- 12) 山下暢子他：看護学実習における学生行動の概念化，看護教育学研究，12(1)，15-28，2003.